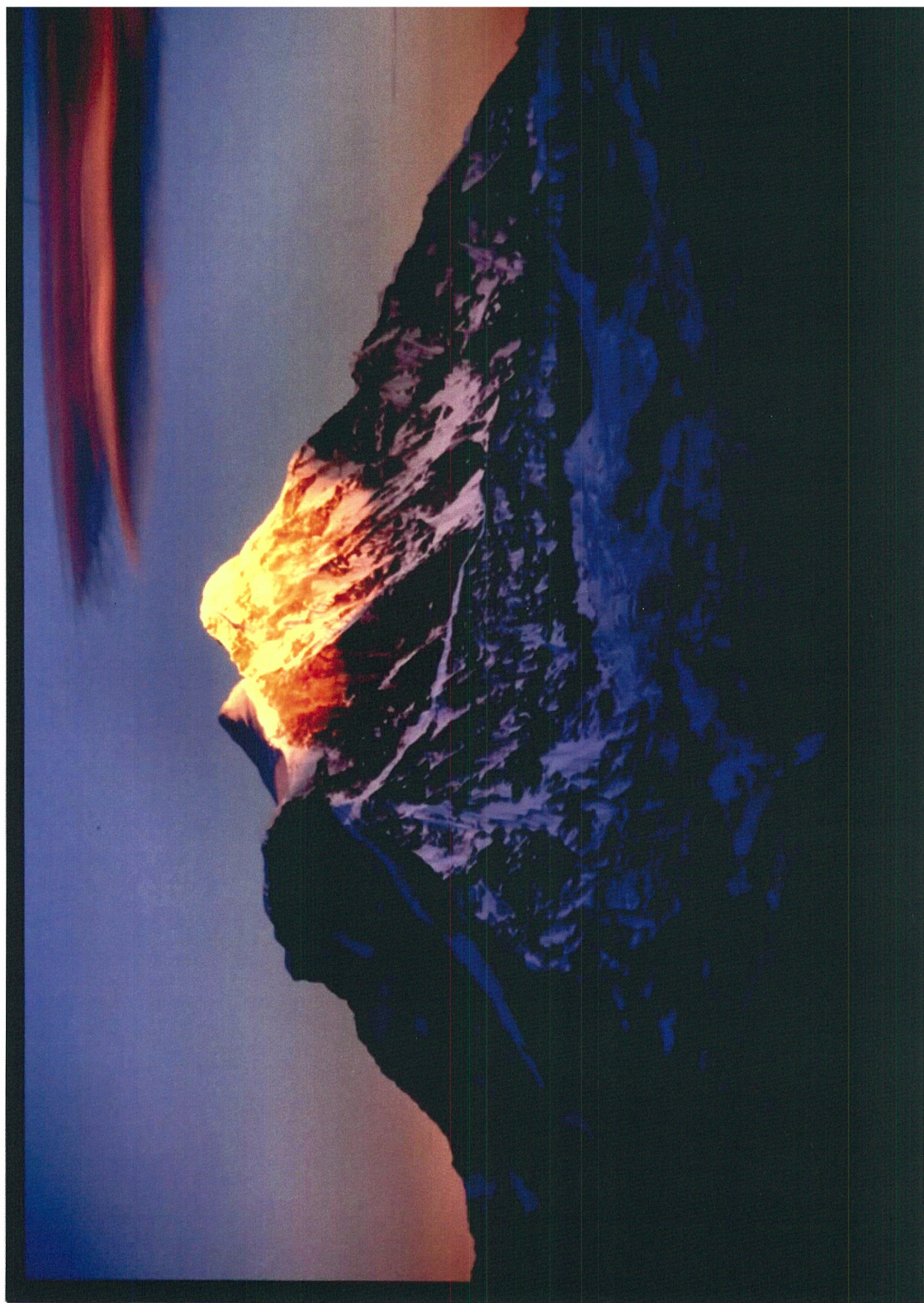


O C U A C

大阪市立大学山岳会会報 No. 49 2009.11.25

目次

		頁
写真（ガウリサンカールの日の出）於：ヤルン・リ頂上	佐々木 惣四郎	1
ヒマラヤトレッキング		
・エヴェレスト街道歩きとアイランドピーク （6189m）登頂	伴 明	2～4
・ゴーキョからカラパタールへ	佐々木 惣四郎	5
・ロールワリン山行	伴 明	6～11
ニュージーランドトレッキング		
・何とか歩けたヒューフィー・トラック	藤本 光子	12～15
山スキー		
・山スキー雑感	片岡 泰彦	16～18
・東沢源流・山スキー	田中 博之	19～20
東北の山		
・飯豊連峰・梅花皮（かいらぎ）岳	兵頭 渉	21～22
南アルプス		
・南アルプス南部 聖岳・光岳登山	福山 昇二	23～24
回想の山行～東カラコルム・ゲントⅡ峰		
・小林隊長とゲント峰の回想	片岡 泰彦	25～26
・AAVK・OB会の海外初登山	竹中 時夫	27～30
トホホの田舎暮らし（白馬ペンション生活）	大島 一恭	31～33



エヴェレスト街道歩きとアイランドピーク（6189m）登頂

伴 明

2007年10月、会員9名でアイランドピークに登りに行ったが、私は順化不足による高度障害から肺水腫の中期段階あたりとなり、登山行為としては高度5700m地点で登ること不能となって下山した。ルクラ2700mからエヴェレスト街道をチュクン4800mまで歩き、途中デインボチェ4400mの裏山ナンカール5000mピークとチュクンリ5500mを登っておいて、アイランドピークBC5000mからABC5600mで1泊後、サミット6189mを目指したのだが、順化方法としての途中2峰の鋸歯行動が逆に過剰な負担となって高度障害が出たと推測される。

2008年5月にダウラギリ山塊のダンプス・ピーク6035mを会社の休み取得の都合もあって1週間で登れるか試してみた。マルファ2700mからヤク・カルカ上部のキャンプサイト5000m近くを3日で登ったら、案の定、肺水腫の症状（咳とピンク色泡状タンとしんどくて足あがらず）が現れ、ポーターに背負われて下山した。6000mを越えるヒマラヤの峰々を登るためにはビスタリ（ゆっくり）方式しかないと実感した。

で、今春 2009年4月24日ー5月23日の間、あらためてアイランドピークを徹底したビスタリ方式で登って見たら、なんのことはない、まずまずすんなりと登ることができた。2007年秋との違いは、完全にマイペース（1人旅ゆえ）で全行程をゆっくり登ったことと、2峰への鋸歯行動をやめてその日は休日にあてたことだった。ルクラからアイランドピークBCまでバッテイ（山小屋）泊まりで9日間かけたが、2007年のテント山行の時より1日多いだけだった。

4月28日晴れ

カトマンズ＝ルクラ9時半→モンジョ3時40分

ルクラ2700mのナマステ・ロッジの親父の手配によるポーター1人に伴の荷物19Kgかつがせて出発。3000m以下だとまったく快調なペースで飛ばせる。モンジョ2700mでは部屋もトイレもきれいなナマステ・ロッジ&レストランに泊まる。

4月29日晴れ

モンジョ8時20分→ナムチェバザール13時

ナムチェ3400mの登りは3時間かけてゆっくり登る。ナムチェはたくさんバッテイが

4月30日晴れ

ナムチェでレスト。4歳児から8グレードある小学校（全生徒数75人）を見学。国語（ネパール語）の授業の時以外は英語でやっている。校長に何に困っているか聞いたら、十分な教材と運動用具が与えられないことだと。校庭からはコンデが美しい。

5月1日晴れたり曇ったり

ナムチェ9時10分→ブンキ・テング13時

キャンズマ3550mあたりの山腹の山道はタムセルクやカンテガが美しい。珍しく白紫色のシャクナゲの群落が上品に咲いていた。途中で出会うポーターたちに聞いてみると、大体一日行程で20RP/Kgの担ぎ賃をもらっているらしい。100Kg担いでいるポーターもいた。ブンキ・テング3250mのエヴァーグリーン・ロッジに泊まる。

酸素飽和度／心拍数、86／61。

5月2日晴れ

ブンキ・テング8時→テンボチェ10時20分→パンボチェ13時

テンボチェ3860mで上から降りてきた日本人24人のイムジャ湖調査隊に会った。隊長は長野のグルーポドモレーヌの吉村さんで、48年前滝谷事故で世話になった吉沢一郎さんの後輩にあたる。しばし吉沢さんの話を語り合った。パンボチェのバッティに泊まる。75／81。

5月3日晴れたり曇ったり

パンボチェ8時10分→ペリチェ11時半

雪がすこしばらつく中をペリチェ・パスを超えて、ペリチェ4240mのアマダブラム・ロッジに泊まる。オーナーはニマ・シェルパといい、英語より日本語がうまい。おかゆとペペロンチーノの作り方を教えてあげた。72／90。

5月4日晴れ

ペリチェでレスト。チュクン／ナンカール、チョラツエ、タボチェ、アマダブラム、カンテガ、タムセルク、ロブジェイーストと周りを峻峰に取り囲まれた河そばの台地にある。

5月5日晴れ

ペリチェ8時→デンボチェ→チュクン12時

チュクン4730mまでノンビリと歩き、アマダブラム・ロッジに泊まる。ロブジェから先に到着していた佐々木夫妻一行に会う。コックのアン・カミのニンジン／タマネギ／にんにくの茎のかきあげてんぷらはすごい。こんな高所でこんなパリッとしたてんぷらを揚げるなんて。75／90。

5月6日晴れ

チュクン8時40分→アイランドピークBC12時40分

佐々木に借り受けたシェルパのテンバ（登山料USD350、支度料USD200、日当

USD 20×4日間＝USD 80など払って)とポーター1人、テント食料3日分持ってBC 5000mへ。砂ぼこり強し、途中の平原状河原からアイランドピークの全貌が見え、3本リッジの右端の下がBC、暑い。テントを張る。70/90。

5月7日晴れ

BC 8時→ABC 10時半

草、岩の山肌をゆっくりゆっくり登る。ゆっくりすぎてしんどさを覚える前にABC 5600mに到着。雪のない裸の岩／土の地にテントを張り、ポーターが30分かけて近くの沢へ水を汲みに行く。前面にバルンツエの北側が真正面に見え、氷雪岩が輝いている。昼食はマーボ春雨とカニ缶と紅茶、夕食はカレーと下で作ってきたおにぎり。

55/88。

5月8日晴れ

ABC 4時15分→アイランドピーク頂上12時10分→ABC 16時

朝、53/90。同じABCにいたイタリア人達のパーティが皆出払ってから出発。

1 昨年引き返した5700mあたりの岩／土の岩レキ地帯のルンゼを登って、右にトラバースし、リッジや斜面を直上すると岩稜の終点から雪の境目となり、ゆるい氷河が現れる。この雪と岩の境界までの登りが第1段階。ここから2本のクレヴァスに掛けられたアルミ梯子を渡ってゆるやかな氷河の雪原を進むのが第2。進行方向左の高さ150m、幅1km、傾斜50度ぐらいの雪壁に上から2本のフィックスザイルが下がってきており、半分凍った小さいセラックスの林立するこの雪壁にユマールをかけてごりごり登るのが第3段階。まあ落ちるとヤバイのでしんどさを忘れてひたすら登る。第4段階は雪壁を登り切った笠の2尾根のような稜線に出て、頂上までの稜線づたいの距離300mぐらい40分、ここもフィックスが張られていた。ABCから8時間、しんどさは「筆舌につくしがたく」なんども引き返すことが頭に浮かんだが、足が上がらぬことはなかったのでゆっくりゆっくり登ることができた。頂上にはラマ教の旗が数本たばねて翻っていた。快晴でマカルーが大きく見えた。同じルートをたどり、ABCに午後4時帰着。12時間行動でくたくた、紅茶1杯飲んで寝た。

気温マイナス5度。

5月9日晴れ

ABC 6時半→チュクン10時

朝、53/90。雪が1-2cmうっすらと積もっている。チュクンへ下りて佐々木隊のコングラチュレーションを受ける。ヤレヤレでした。

5月10日－5月18日

帰途ゴラクシェップまで足をのばし、5月17日ルクラ、5月18日カトマンズに帰着した。

今回のトレックは、ワイフ（連れ添い）のお供でゴーキョからカラパタールへ旅をしました。カトマンズを出て帰るまで22日間の旅でしたが、全くのアマチュアであるワイフは、予想以上に頑張り、ゴーキョリ（5357m）、チョラ・パス（5368m）、カラパタール（5550m）、チュクンリ（5406m）等々を無事にこなす事ができました。

しかし、やはり高度の影響で軽い頭痛と下痢が10日以上続き、チョラ・パス超えの際は頭痛もひどく、どうなるかと気をもみました。ただ、心配していた足は順調に動き持ちこたえました。4000m以上のトレックが17日間で、テント泊り13日小屋泊り8日間という状態で、5月5日には、伴さんとも合流でき、登山中チュクンに4日間滞在しました。最低気温もマイナス5度～8度で天気にも恵まれた旅でした。

ゴーキョからの景色の素晴らしさ チョーオユー 8201m、ギャチュンカン7900m、長大なゴズンバ氷河の調和は、言葉に言い尽くせない程です。エヴェレスト方面は逆光でしたが、バルンツエ、パルチャモもきれいに見えました。

チョラ・パス超えには、正味4時間かかりましたが、周囲の眺望は、これまた素晴らしく、カラパタールとは一味違う良さであります。このゴーキョコースは、途中のキャンプ地も5500mの大岸壁が立ちそびえ、ゴーキョのド・ボカリ湖も色が変わって美しく、抜きんでたトレックコースだと思います。

カラパタールの美しさは、山がすぐ真近に連なっていることで、エヴェレストがキングでプモリ、ヌプツエ等々が続き、エヴェレストの高さには惚れ惚れします。今年は45隊がチャレンジしているとの事です。麓のロブチェの夜は大変冷えしました。

チュクンに降りて、5月5日、伴さんと無事 予定通り会え、我々のシェルパ、テント等々を4日間譲りました。この間、イムジャ湖およびチュクンリに登りましたが、アイランドピーク、マカルー 8481mが大きく見えて興奮しました。

5月9日、伴さんが無事登頂を終えて ハイキャンプからユックリ降りてくるのを迎えにゆき、12時に小屋帰着。その後デンボチェに移り、翌日、我々はルクラへ、伴さんはカラパタールへ出かけられました。

帰路特筆すべきはデンボチェからのタムセルク、ドーデコシからのクスムカングリの迫力は抜群でした。行程最終日は、雨が続き、伴さんはカラパタールで、膝上の雪に見舞われた事でしょう。

5月14日 カトマンズにて

ロールワリン山行

(ヤルン・リ 5630m、パルチャモ 6273m)

伴 明

参加者：伴 明、佐々木惣四郎、シェルパ、MING TEMBA、
コック／キッチンボーイ／ポーター、9名（NA以降6名）。

期間：10月5日カトマンズ発－10月18日ヤルン・リ登頂－10月23日パルチャモ
登頂－10月28日カトマンズ着。

費用：飛行機代（日本－カトマンズ往復）11万円、現地費用29万円、合計40万円。

10月3日カトマンズに着き、4日マナン航空と来春リルン墓参団30名の隊別ヘリコプ
ター輸送の打合せ、24名乗車用ヘリ3回飛行で計13,000ドル。あと受入れエー
ジェントのエコロジー・ツアー会社と打合せ。来春滞在予定ホテルについては10月29日
カトマンズ・ゲストハウスと打合せを行った。

10／5曇り

本日の為替レートはUS\$100＝7,300RP、つまり1ルピーは1.37セント、
1万円は8,300RP、つまり1ルピーは1.20円。
円高さまさまといったところ。

安ホテル（USD11／人／泊）だが、清潔で居心地の良いトロン・ピークGHを7時半
出発。小型チャーターバス（借り賃3万ルピー）に12名と全食料／テント／炊事用具を
積んで一路東へ。途中ハリドールで昼食。ここから中国国境のコダリまで車で2時間だが、
中国製の衣類から日曜雑貨まで店先にあふれている。チャリコット以降未舗装道路のため
3時間半ゆられっぱなし、夜18時うす暗くなってシンガテイ950m着。テントで寝る。
酸素飽和度95、心拍数75。

10／6晴れのち曇り、雨

シンガテイ8時発、本流と分かれて青磁色のタマコシ河沿いの平坦な山道をたどり13時
45分ジャガット着。他にはテシラブチャ峠越えのアメリカントレッカー3人組と同道。
エヴェレスト街道と違って静かな山旅。ポーターが遅い。小学校舎のある広い庭付きの
バッティに泊まる。夕食は鶏2羽（800RP／羽）つぶす。キモを焼いて醤油づけに
したのがとてもうまい。

10／7終日梅雨状の雨

尾根の突端にはゴンパと小学校があって、眼下にロールワリン河が玉の輿河へ流れ込むあたりを見はるかす景勝の地。ミリ畑が多い。すこしミリのチャンを飲む。

10/8雨降ったり止んだり

8時シミガオンを出てしばらくは山腹にそって森林の中を登るが、ヒルに足腹頭など数箇所吸われてまことに不愉快なり。奔流を噴出す美滝を過ぎ、登りが終わってロールワリン河へ降った河そばのドンゴン3000mに15時に着きバッテリーに泊まる。12度C。夜中満点の星月夜。

10/9スカッ晴れ

ドンゴン8時ーベデイン14時30分。モンスーンがすこし遅れて明けた模様。

いったん河から離れ左岸の山腹をナナメに森林帯を登る。また降りてロールワリン河の対岸にわたり、それからはずっと右岸ぞいに少しずつ登りながら進む。すばらしい大滝をふたつ、これで5つ、ロールワリンのアプローチは滝が見事。山道ぞいに珍しい植物あり、インゲン豆のさやの極小のものが、触るとたんピュッとほじけてとても面白い。種を採って日本に持ち帰り植えることにした。他には青いリンドウが美しい。ベデイン3700mは石垣の家屋が50軒ぐらいあり、多少の青菜とジャガイモを植え、ヤク、ゾッキョ（雌のヤクと雄の牛の掛け合せ）を飼っている。泊まったバッテリーではソーラーによる電灯あり、電話も外国に通じる。2人の日本人女性に会う。

10/10晴れ

ベデインでレスト。日本人女性の一人は新潟でアトリエを持っている安野立子さん、6.3歳で7月20日から2ヶ月半ずっとここベデインとナ（NA）4200mに滞在し、草花の絵を描いている。‘04年／’06年にチョーオユー／シシャパンマに登っておりロールワリンでもパルチャモ他登ってきたと。部屋の中で朝8度C、昼13度。酸素飽和度／心拍数、75／90。佐々木は85／75。

10/11晴れ

ベデイン8時ーナ11時。昼食後68／99。

ナへの山道は両側を高さ500mぐらいの岩壁にかこまれた幅300mぐらいのロールワリン河溪谷の右岸にそってなだらかに上がっている。途中ガウリサンカール7135mの東面の肩や、ナに近づくとナの背後に聳えるチェキゴ6257m、バモンゴ6400m、カンナチュゴ6735mの3人娘が白いヒマラヤ襷を輝かせている。ナはカルカ風の家屋が20軒ほどあり谷間の中に拓けたのんびりした放牧村で、河上の正面奥にはツオボジェ6689mがどっしりと天空を限っている。村から30分ほど登った背後の岩壁下の滝まで行ってみたが、リンドウが咲いている草地、ガレ場から下を見ると青磁色のロールワリン河がゆるやかにうねっており、のどかで心休まる桃源郷そのもの。

10/12晴れ

ナでレスト。

10/13 晴れ

ナ8時－ドウド・ポカリ13時。ツオ・ロールパ（氷河湖）4540mへ向かう途中のノルウェーが建てた鉄橋をわたり、左の山道を辿る。リピモシャール氷河の左岸から右岸にクロスしてモレーン上の細道を登ってドウド・ポカリ4800mへ。

エメラルド色の直径100－200mぐらいの美しい湖で、ツオボジェ、ドラナグリ6801m、カンナチュゴの峰々に囲まれた地上の楽園。小さなチョルテンと湖を横断するダジャ（経文の書かれた旗）が氷河風になびいていた。

すこし下がった小さな目玉池のそばでテント。夜の星がギラギラと目に痛い。

10月14日 晴れ

ドウド・ポカリ8時－ナ11時。

下りは氷河右岸のモレーン上の細道を辿ったが、途中でケルンもなくなり石とブッシュの中間を降り、2度氷河の水流を渡渉してナへ帰った。

10月15日 晴れ

ナでレスト。

10月16日 晴れ

ナ8時－ヤルン・リBC12時。

朝、85/70。ドウド・ポカリ往復が多少順化に効いたかな。

ラムドン5930m目指して出発。ラムドンBCもヤルン・リBCもほぼ同じ氷河上の台地5000mにあり、ヤク道というか急な登山道がついており、フランス、イギリス、カナダなどのチームがシェルパポーター入ると総勢20－30人が氷河湖そばの台地にテントを張った。ここも又まことに景色の良いところ。夜中、翌朝の気温マイナス5度C。夜、82/79。

10月17日 晴れ

BC9時－ヤルン・リABC12時。

イギリス隊がラムドン目指しC1を出したがポーターは12時間かかってBCへ帰ってきた。今年のラムドンへのルートは氷河のクレバスが大きく割れてその迂回に時間がかかり、CI、C2が必要だと。それを聞いて我々はすぐさまラムドンをやめてヤルン・リ5630mに変更。BCから頂上往復可能だが、無理せずにヤルン・リ舌状氷河真下にABCを張る。ピラミダルなチュキマゴ6259mが真正面に聳え、ランタンのホンゲンドブケのようなすばらしい眺め。ラムドンへの氷河が平らで長く続いているさまがよく見えた。

10月18日 晴れ

ABC4時－ヤルン・リ頂上6時－ABC7時－BC8時－ナ12時半。

カレーうどん半分食べて真っ暗な星空の下を出発。アイゼン、スパッツをつける。ABCの目の前の40度ぐらいの雪斜面約50m30分の急登が苦しい。登ると雪原状の氷河を

ことはないが、とにかくにも1歩ごとに口から心臓が飛び出しそうでは一は一あえぐ。息が急に止まって死ぬかと何度もおもう。とにかく足は上がってくれたのでやっと頂上着。何もない8畳ぐらいの岩の出た雪面で、絶頂である。ちょうど朝日がガウリサンカールを染め、ラムドン、チュキマゴ、ツオボジェ、ドラナグリ、カンナチュゴ、メンルンツエの氷峰が白く輝いている。ABCを出発してこの頂上までの2時間は史上最高の苦しさだった。頂上で佐々木にしんどないのかと聞くと、しんどないけど足が重い、伴さんや山田はいつもは一は一言うててよく登れるなーだと。どうも体の機能がかなり違う様子。

夜が明けた頂上からの降りは、朝日の中をロールワリンの山々に囲まれ氷河の空気を体一杯に感じながら軽々と下る。途中でカナダチームが登ってくるのに、もうちょっとや、がんばってねと余裕を示す。BCにはとまらずに一気にナまでの高度1400mを降りる。

10/19 晴れ

ナでレスト。安野さんに夕食をよばれる。チャン飲みすぎて夜間不快。

10/20 晴れ

ナ8時50分ーカブグ12時。

緑泥色をしたツオ・ロールバの排水口を横切って、右のサイドモレーンの内側を登り、小さなバッテイ2軒あるカブグ4600mにテント。食欲不振が現れ始め足が重い。湖は見えないが、そばに小川が流れのんびりした所。

10/21 晴れ

カブグ8時50分ーノイジー・ノップテントサイト15時（伴17時）。

ガラガラサイドモレーンを高捲き湖を見たあと、トラカルデン氷河の真ん中を、次から次へ現れる波のような大石小石混じりのガレ場を登り降りしながら、ケルンに導かれて高度を上げる。岩壁下のガレ場テントサイトは5000m。フランス女性4人チームも泊まる。トラカルデン氷河とドラムバウ氷河の出会い地点で氷河の壮大な眺めがビッグフェラゴ東西峰の下に展開している。伴は疲れで足が前に進まず皆より2時間遅れて到着。

10/22 晴れ

N・Nテントサイト7時15分ーテシラブチャ峠西下（11時半ー13時）ーテシラブチャ峠15時半。（伴は峠西下泊まり13時）。

いったんドラムバウ氷河を横切り、左岸の大岩塊の腹を縫うようにして氷河上部へ出る。ここはナから連れてきたシェルバのプルバ・テンジンが100mほどフィックス工作进行了。あとはほぼ平坦な氷河上の雪面を登り気味に歩いてテシラブチャ峠西下へ。伴はしんどくて死にそうで、吐き気とセキが出始め、これは肺水腫の前触れらしいと感じる。

1歩高みへ足をあげるのが苦しくて皆より2時間遅れて峠西下5400mへ到着。待っていたテンバ、佐々木と相談し、彼らはテシラブチャ峠5700mへ上がり、伴はここでプルバとテントで寝ることにする。夕食はマーゴ春雨半分とコーンスープのみ。初めてダイアモックスとバップファリン1錠ずつを飲む。

10/23 晴れ

佐々木、テンバはテシラプチャ峠4時40分ーパルチャモ頂上8時20分ー峠帰着10時10分、伴は峠西下8時半ー峠10時半、全員で峠12時ー峠東下15時10分。

足はあがるが、1歩毎に息が切れてしんどい。しんどいという英語は何と言うかな、ネパール語ではサスポレオ！だがなと思いつつ、ガレ場、半分氷った雪面を登ってやっとのことで5700mの峠着。佐々木とテンバは早朝峠を出て5時間半でパルチャモ往復、地吹雪状の風がひどくアンザイレンを解いて休むひまもなかったと。その割には平気な真っ黒い顔をしていた。伴は峠で1日レストすれば登れそうな予感していたが、また肺水腫に突入かもと弱気になってパルチャモ往復はあきらめた。すぐさま峠から東のクンプ側に下山。1箇所ガレ場にフィックス。降りもしんどい。氷河湖3つある5100m地点でテント。朝カレーうどん半分だけで食欲まったくなし。くらべて佐々木はなんでももりもり食べて、何度も出している。やはり酸素不足→疲れ→食欲不振→高度障害か。70/84。

夜は満天の星空。

10/24 晴れ

テントサイト8時15分ーターメ11時半。

毎日晴ればっかり。朝75/85。下ると気分はすっきり落ち着いてきてターメまでの足取りは軽い。タマ・コーラ沿いの道は左岸の山腹を縫うてやさしい。テンボを過ぎると前方には左からアマダブラム、カンテガ、タムセルク、K-41がそびえ、タムセルクの右にはスーラとよぶ針峰が天を指している。アマダブラムの右にバルンツエがすこし顔をのぞかせている。立派なゴンバの前からターメに下りる。ポーテコシとタマコーラの合流点の三角州状の地形でナムチェやペリチェより広々として気持ちよい。バッティの庭にテント。暖かい日差しをあびて寝転んでいると、後ろにコンデの3峰と前は前述の峰々が濃紺の空をバックに輝いており、それにわずかな白雲がたゆたうさまは1幅の天上画、ここも地上の楽園。

10/25 晴れ

ターメ3800mでレスト。朝ミンマ・ツエリンに会いに行く。76歳になってすっかり年をとってリルン1次隊、2次隊の時の面影わずか。目が悪くなり、チャンも飲めなくなった。息子、娘8人いるとかでN. Y. やカトマンズに住んでいる。ターメでは嫁さんと二人りっぱな家に住んでいる。アンダワはダージリンだが便りが来ないのでもう死んだのでは。ギャルツエンの娘はカルカッタでインド人の医者と結婚した。夕食によんで1次隊遭難時の話や2次隊モリモトピークの話をした。夜はあきれるほど星空がきれい。

10/26 晴れ

ターメ8時ー11時ナムチェ12時40分ーモンジョ14時20分。

たバッテリーでは韓国SAMSUNGの冷蔵庫25,000RPが置いてあった。日本製なら15万円はするだろう。モンジョ2700mのバッテリーの庭には金盞花が花盛り。

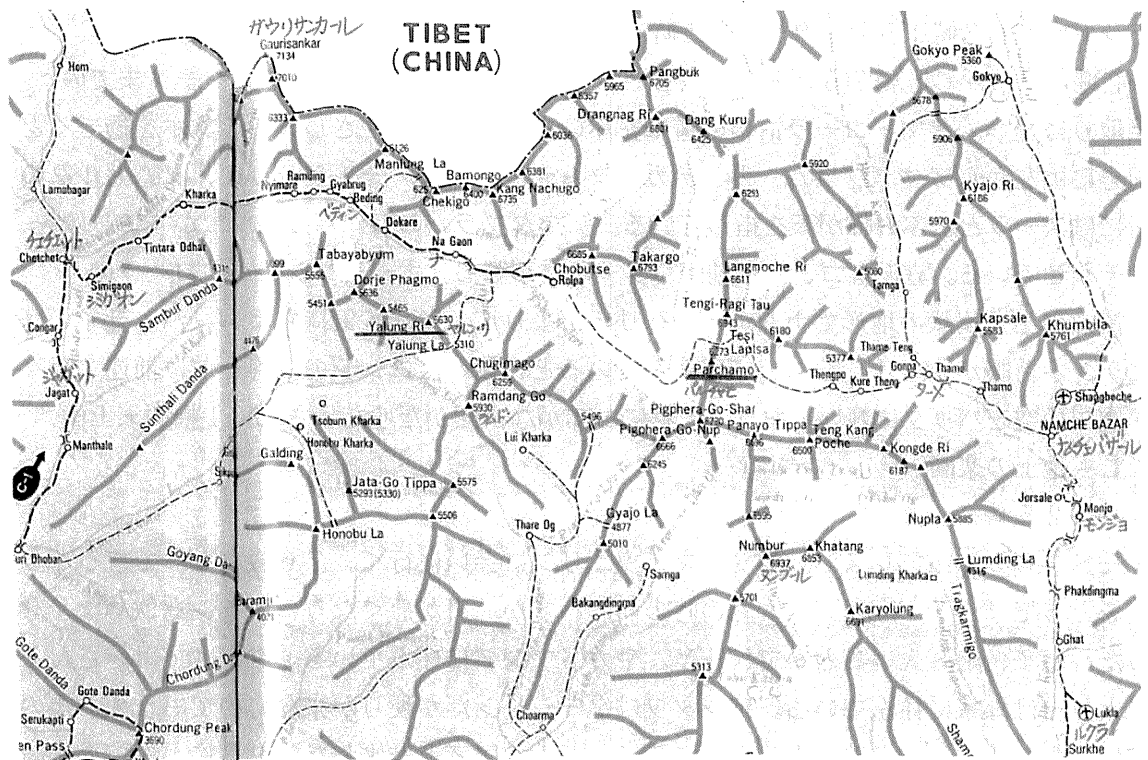
10/27 晴れ

モンジョ8時25分ールクラ11時40分

勝手知ったる街道筋を飛ばして3時間15分でルクラ2700mに帰着。人なみが途切れることはないほどのこの街道は盛況ぶり。ナマステロッジ泊まり。キッチン、ポーターの6人に伴、佐々木合わせて8,400RP、シェルパのテンバには200ドルのチップを渡す。夜チャンで打ち上げ。

10/28 晴れ

ルクラ飛行場で2時間半待って、アグニ・エアー便25分の飛行でカトマンズに帰着。機中ロールワリンの峰々、ガウリサンカール、ドルジェラクパ、最後にランタン・リルンが白く光って見えた。



掲載地図：「ネパール・ヒマラヤ トレッキング案内」62頁ー63頁
(中村昌之・内田良平 著。山と溪谷社)

何とか歩けたヒーフィー・トラック

藤本 光子

光子が去る10月1日に加古川の娘の家で倒れました。すぐに救急車で市内の脳外科病院に搬送され検査の結果「くも膜下出血」と診断され、ただちに手術。術後、合併症が発生し脳梗塞をわずらい、目下同病院で入院加療中です。果たして、何処まで回復するものやら不透明です。このニュージーランドの山旅の記録は2009年2月に南島の北西部にあるヒーフィー・トラックを歩いたものです。全長80キロを5日間で歩きとおしました。あの元気であった光子が、もうもう戻ってくれないのではと思うと悲しくなります。
(2009年11月3日 藤本 勇 記)

* * * * *

ニュージーランドの南島はずっと晴れの日が続いていた。念願だった Heaphy Track のハットパス (小屋券) をネルソンで手に入れて、トランスポートも頼んでタカカに向う。大きな丘を越えたタカカの町の宿の主人は、ジンバブエ生まれとかで話が盛り上がった。近くの Fish & Chips 屋だと2人で1000円くらいだけど、ビールも飲めないので夕食は少しぜいたくにレストランで魚料理とラム料理、ワイン。早めに眠りにつく。

翌朝、出迎えのミニバスが、コリンウッドを経てスタート地点のブラウンハットまで送ってくれる。一緒に歩き出したのは、イギリス人の兄弟とかいう2人組と私たちのみ。ブナの大きな木の林が続き涼しい。緩やかな登りが続く。初日なのでダンナの荷物は食料がけっこう重い。2時間ほど登ると、眼下に河の流れが見下ろせる見晴らしのよい休み処があった。昨夜、安宿でにぎっておいたおにぎりにのりを巻いて食べる。おいしいー。やっぱり私達にはおにぎりが一番。それから七曲がりのようなゆるい登りが続く。シェルターに着いてから、もう小屋が見えるかと思うと、また巻き道が続くので少し疲れる。やっと Perry Saddle Hut に着いたが、一番最後だったので2段ベットの上しかあいていない。早く着いた人たちはトランプを楽しんでいた。イギリス人が親切に“変わろうか”といってくれた。まあ上も暖かくていいでしょう。パスタをゆでて夕食を作る。水もガスもあるのでずいぶんラクチン。オーストラリアのパスから来たという親子5人連れのパパは、本当によく働く。ママは疲れて横になっている間に、5人分の食事とデザートまで作っていたのにはびっくり。私のとなりのベッドだったんだけど、そのイビキの大きさには更にびっくり。どこでも眠れるというのが自慢の私でも夜中の2時頃まで眠れなかった。

明け方は素晴らしい天気と鳥のさえずりで目が覚めた。スープ、パン、Tea と簡単な朝食をとる。最近ミルクは粉ミルクを使っている。軽くて持ち歩きには便利。マヌーカという木が、白い小花をいっぱいつけており風にゆれると、その香りが私達を包んでくれる。

ぱりして気持ちがいい。この後いくつかの支流をわたり草原地帯を進む。歩き出して4時間ほどで、この日の宿 SAXON HUTに着く。このコースの上で一番新しい美しいハットだ。洗濯干し場まであってびっくり。トイレもハイブリッド仕様とかで、虫もないし臭わない。ハットから木のボードを伝わって足を汚さずにゆけるように設計されている。ランチはヌードルスープとクラッカー。タイ風ヌードルだったけど、日本のチキンラーメンの方がおいしいかも。午後は皆読書したり、水浴びに出かけたりで静か。私達は昨夜の睡眠不足を取り返すために昼寝する。この日もすばらしい天気だったので、夜中の星空の美しさといったら表現のしようがないほどだった。まわりに明りがないと、空気が澄み切っているからか。



ぐっすり眠った後は目覚めもすっきり。荷物をパッキングして歩き出す。1時間ほどで Buller と Tasman の境界線に着く。この辺りもマヌーカのブッシュと、草原が交互に現れ気持ちのよい道が続く。鼻歌まじりで歩いているうちに Jams Mackey Hut に着く。Hut の近くからは明日下ってゆく Heaphy 河の河口がよく見える。ワァー遠いなぁー。この日はタカカから来た2人の子供のママに料理をならう。乾燥ポテトを熱湯で練りツナ缶、チーズを入れて混ぜ、小判型にまとめたものをオイルで焼く。これが Fish Cake というんだそう。子供達はこれが好物らしく、おいしそうにおかわりしていた。翌日のランチのベーグルまで焼いておられた。アメリカ人の若い男性は、生姜をけずり、人参、玉ねぎ、乾燥豆をカレーパウダーのスープの中で20分間米と煮てカレーおじやのようなものを作っていた。いい香りでこれも又まねできそう。フリーズドライのなめこ汁に熱湯を注いだら、三つ葉、なめこ、味噌の香りがわっと来て“ウーン最高”と思ってしまった。

後はライスとハムの簡単な夕食だけど、翌日はけっこう歩く時間がかかりそうなので、食べたらすぐ眠りにつく。

この日は6時に起きて6時40分に歩き出す。ブッシュの中をどんどん下ってゆく。段々と木の高さが増してくる。林の中でロビンという小鳥がすぐそばに来た。全然人を恐がらない様子。グレイの身体で白い胸、ころっと小太りで何ともかわいい。Lews Hutに着くと小屋の周りは Funtail がいっぱい。扇子を広げたような尾をたてて、見て！見て！といわんばかりに飛びまわっている。えさになるサンドフライはいっぱいいるんだから元気なはずだ。ニカウというやしの林が現れ始める。雨が降り出したので座って休めないでドンドン歩く。朝から7時間は歩き続けて、やっと Heaphy 河の河口の Heaphy Hut に着いた。雨具を干し、甘いミルクティをたっぷり飲むと生き返った。今回は荷物を出来るだけ軽量化するために、砂糖を少ししか持って来なかったのが悔やまれる。雨も小降りになったので、Hut の外に出てみると、前は広い芝生が広がり、その先には打ち寄せる波、白砂のビーチと絵のように美しい。晴れていれば西海岸のサンセットはすごいらしい。Hut には網戸があり、さしものサンドフライも中まで入って来ない。一人旅のおばさんは Express Rice という湯の中で3分間煮るだけのリゾットで夕食。彼女は5万分の1のいい地図を持っていた。歩いた道がよく分かる。

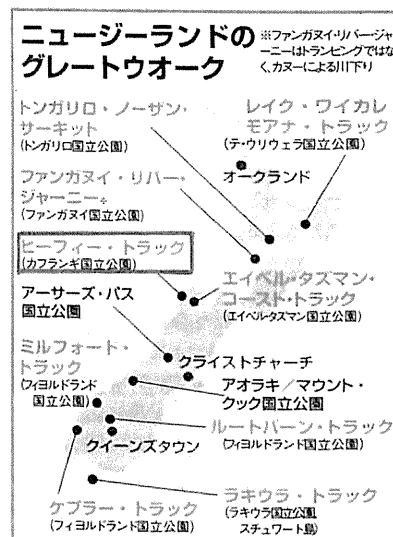
ラストの日は午後1時30分に Kohaihai シェルターに迎えの車がくるので、遅れないように6時40分に歩き出す。白い砂浜の広がる Heaphy Beech は長い。ほとんど平坦なやしの林の道がえんえんと続く。雨も時々ふってくるが林の中なのであまり濡れない。橋の上だとサンドフライも来ないか、と座ってオレンジをむき出したら、あっという間におしよせてくる。でもオレンジはジューシーで甘くてほっとする。にび色（鈍色）の空の下に大きな波が打ち寄せてはくだける。本当に雄大な景色だ。サンドフライに追われるように美しい海岸線をドンドン歩いて行くと、思っていたより早くシェルターに着く。



感謝。ちなみに DOC の Hut 代は一人 1泊 1Bed 1250円（ガス、水代こみ）。

少し待っていると迎えるシャトルがやって来た。ウエストポートで時間調整のため40分間休んだので、その間に街角のカフェでトーステッドサンドイッチとコーヒーを注文した。トーステッドサンドイッチは中身にハム、チーズ、トマト、マッシュルーム、オニオンなどをはさんで、こんがり焼いたもので私達のランチの定番。カフェのおやじが運んできた熱々のをかぶりつく。久しぶりのコーヒーと満点の味。帰って体重を量てみたら2kg位減っていた。ダンナもぽっこりおなかが少し減ったようだ。あんまり食べないで歩いたらやせるものですね。

ネルソンへの帰る道中、揺られているうちに心地よい振動で眠りこける。ふっと眼がさめると外はホフツカワの真赤な花がまっさかり。まさに夏です。



掲載図：「地球の歩き方 C10 ニュージーランド」231 頁&447 頁
(2010～2011 年版。(株) ダイヤモンド・ビッグ社)

山スキー雑感

片岡 泰彦

最近は年に数回、山スキーで雪面を歩いています。喧騒のスキー場を離れ、シールを付け、トレースの無い雪原を、木立の雪を払いながら歩くことに、なんとも言えない爽快感を感じています。今手元には、2本の山スキー板があり、150センチ強のファットスキー板と100センチのショートスキー板を山行に合わせ使いますが、ゲレンデスキー場へは、殆ど行かなくなりました。以前は、長い板を使用していたこともありましたが、現在の短い板に変えたら「歩く」ことも「滑る」ことも非常に簡単に思えました。僕は、15年程前からスキー板の定番となっている、くびれたカービングスキー板を使ったことがありません。短く回転が楽なので殆どの人が回転性能の高いスキー板を使います。山スキーの場合、シールを装着する関係上、腰がくびれる曲線が、エッジと斜面の接地面を小さくしてしまうので、シールによる斜登高に不利だと想像してました。山スキー仲間と言わせると、安定感はあまり代わらないと聞きますが、理屈的に、斜面には直線的なエッジがシックリ合うはずで、曲線エッジのカービング板を避ける理由です。長い間、道具の買い替えをしませんでしたが、一昨年更新したので、発売されて間もないファットスキーを持っているのです。昔の道具と比べたら雲泥の差を感じます。

僕は、山岳部に入るまで、スキーをしたことがありませんでした。1回生の時に梅池で学生をお客さんとした公募スキースクールに参加したのがスキーとの出会いです。梅池館では真面目なスキー組と酒宴組に分かれてましたが、僕は前者に所属し、斜度の無い鐘の鳴るゲレンデで転んでいました。暫くして革の登山靴で履ける山スキー板を買いましたが、足首がグラグラで、転ぶと多くの体力を消耗し、滑っても技術がないので疲れる始末で、不便な道具とも思っていました。氷河の歩行にはスキーが安全と聞いたので、カラコルム・ゲント峰に持って行きましたが、ヒドンクレバスがある斜面は楽しく滑れないことが分かり、最後には現地で破棄しました。

後藤さんに山スキーに誘われたことがあります。「今、道具が無い」と断りましたら、用意するとの返事だったので、参加しました。芦屋高校の山岳部後輩の三輪さんと3人でしたが、僕の道具を用意頂いたのは、後藤さんでなく三輪さんで、踵が8センチほど上がるマーカーというビンディングのついた板と靴が支給されました。踵が90°上がる他の2人は歩行スピードが速く、快調に飛ばしますが、僕は体力で付いていきました。GWの雪面なのであまり潜らない事も幸いでした。剣岳の馬場島から入山し、池の谷～池の谷右俣をドン詰りから滑降～左俣を登り返し、三の窓～小黑部谷～大窓～白萩川を滑って馬場島

ました。後藤さんは、自動車免許も無いのに黒い高級中古車を保有されたこともあります。僕が名古屋に在住していた縁で後藤さんが亡くなったときに、踏み込み式のチロリアのビンディングが付いた山スキーセットを頂き、永年愛用させて貰いました。あの板のお陰で、僕の山スキーに対する考え方が変わり山スキーを面白いと思うようになり、滑りも上手くなりました。

88 年は、名古屋から東京へ転勤した年ですが、JAC の指導委員会の講習会に山スキーを取り入れた関係で、その後、尾瀬・八甲田・蓮華温泉によく行きました。京都 AC の若手山岳部 OB も指導委員会に引き込んで、講習会に参加してもらい、また個人山行にも行くようになりました。京都大学は登山にスキーを積極的に取り込むクラブのようで、色んな技術を教えてもらいました。写真を添付していますが、この頃のスキー板は 190 センチの板を履いており、深雪に弱く、藪漕ぎに非常に不利なものでしたが、三輪さんから安く譲ってもらったものですので、文句がいえません。この時は 4 日間で、室堂～立山～御前谷～内蔵助谷～剣沢～小窓谷～西仙人谷～白萩川～ブナクラ谷～折尾谷～西谷～毛勝山～東又谷と剣北方稜線のコルを何度も越え合計のスキー滑走は標高差 5600m に及びました。(1999/5/1～5/4 の記録より)

北大の OB とも良く行くようになりました。ワカン是我々の冬山道具として必携品ですが、北大山岳部の人は、靴を履くようにスキーを使い、滑りも上手いと聞いていました。しかし、一緒に行くと、上手な人もいましたが、滑りの上手でない人も多くいた事を記憶しています。ただカッコは悪くとも、荷物を背負っても転ばないスキー操作と雪の生活技術はさすがです。ある人は、ビンディングの金具ボルトを板のソール面まで貫通させ、ナットで止めていました。滑走面の穴が、滑走スピードを低減しますが、北海道の雪は軽く深くアプローチも長いので、スキーが外れるトラブルで死ぬよりましとの話でした。尤も木の単板スキーの頃の予防措置らしく、今はカーボンの素材となりボルトのグリップもしっかり効くようになってますので、今は貫通させてないようです。

卒業して、東京、名古屋、東京、博多（6 年）、大阪（2 年）、東京（5 年目）と色々な場所で生活しましたが、もう少し落ち着きましたら、山スキーで日数を掛けて深い山に入り込み、深雪と戯れたいと思っています。山スキーの道具は非常に進化し、兼用靴はグレンデ用の靴と殆ど変わらず、全ての道具が軽くて堅牢になってます。その分、道具が非常に高価になっています。若者には、スキーよりもボードの方が人気が有るようで、ボードを担いでバックカントリーに入ってくる人も多くなっています。テレマークスタイルの人も増えてます。ラッセルイメージの「ワカン」ではなく、スノーシューを履く人もいます。僕は、厳しい山での安定感は、シールを着ける山スキースタイルが効率が良く、非常に有

効と思っているので「歩く」「荷物を担ぐ」「距離を稼ぐ」そして「滑る」道具として山スキーをもっと活用していきたいと思っています。



●1999年5月 西谷から、毛勝主稜線の雪底を登る



●1999年5月 折尾谷と小黒部谷出会いの藪漕ぎ

に向けて滑るという計画でした。それは単に野口五郎岳に登ったことがないという理由と、地図で見るとカール状の斜面が滑るのに楽しそうと思えたからです（カールの底には池があります）。最近では超人的山スキーヤーが水晶岳を日帰りした記録もありますが、もはや 50 歳前後のわれわれにはそんな真似はできませんので GW の 5 日をすべて投入してゆっくり行ってきました。

メンバーはいつもの仲間で京大 OB の T リーダー、KDr、山形大 OB の S 君、と新顔のわが市大整形外科の後輩と言っても準教授まで務めた KDr（残念ながら出身は岐阜大でわが市大山岳部とは無縁です）とぼくです。

5/2 新穂高温泉～大ノマ乗越～双六小屋

5/3 双六小屋～樅沢～三俣山荘～祖父岳アタック

5/4 三俣山荘～岩苔乗越～水晶小屋～東沢 2300m～2904m 峰～岩苔小沢～岩苔乗越～三俣山荘

5/5 鷲羽岳アタック～モミ沢～双六小屋

5/6 新穂高温泉に下山

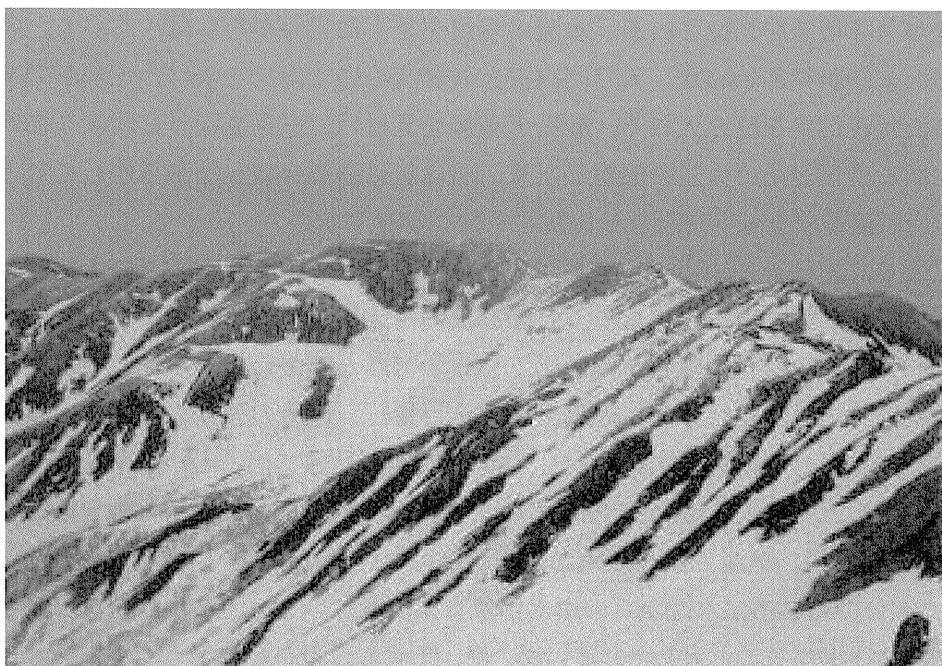
水晶小屋に着いて初めて野口五郎岳が見えます。なんと上部には雪がありません。それで野口五郎岳まで行くのは止めてしまい、水晶小屋から東沢を 2300m まで滑降してから水晶岳の北方の 2904m 峰に登り返しました。2904m 峰からは余りに急で直接岩苔小沢に滑り込めずに温泉沢との分水稜を 2650m 峰手前まで下ってやっと沢に入れました。この日は三俣山荘に帰ってくると 18:00 前で GW なので陽は長いといえ野口五郎岳に行っていたらベース帰着は日没後になっていたのはまちがいありません。

ところで東沢の斜面ですが、滑るに快適な急斜面が 2300m までほぼ均一に続くいいところです。ただ少し堅雪だったのでビビってしまい会心の滑りにならなかったことが残念でした。まあ周囲にことさら目立つ山もなく、景観はたいしたものではありません。斜面が適切と言っても、わざわざご苦労さまでしたというくらいのスキー行でお勧めルートではないと思います。

なお、双六～三俣をスキーで行かれる方もあろうかと思しますので、参考として記しておきますと、ぼくは採用したことがありませんが、夏道に沿って行くのが最も早いようです。ただ、スキーを楽しむ向きには湯俣川に滑り込む方がおもしろいでしょう。双六小屋から直接湯俣川に向かうモミ沢は 2009 年 GW には雪は切れていませんでした。ただ湯俣川本流は切れています。それでも右岸に残る雪を伝って上流の雪が繋がっているところに抜けることができます。ぼくらは念のため 1 本上流の樅沢から下降して三俣山荘に入りましたが、帰りはモミ沢から双六小屋に戻りました。たぶんモミ沢経由の方が早いと思います。



● 水晶小屋からの東沢源流方面



● 水晶小屋からの野口五郎岳

時期：平成21年6月6日～7日

メンバー： 伴 明、山田 裕敏、兵頭 渉

梅花皮岳 このエキセントリックな山名の由来は、谷筋からも尾根筋からも頂を辿るに
険しく“カエラズの山”から転訛、あるいは沢に転がる石が織りなす景色が陶器の釉薬が
作り出す紋様“カイラギ”に似ているからともいわれ、定説はない。

東京支部の6月山はここにしよう、と山田さんから提案が有った。ネットで調べると残
雪豊富、山スキーに好適な沢のようだ。一瞬、スキーブーツと板を担ぎ揚げようかと頭を
よぎったが、今回は初めての東北の山歩きを楽しむこととした。

6月5日(金)18時、日本橋高島屋北口で伴さん山田さん同乗し、ラッシュの首都高を抜
け東北道、米沢経由、登山口飯豊山荘奥の空地に駐車。テント設営後、寝酒無しで即就寝。

6月6日(土)5時半起床、各自用意した朝食を摂りながら出発準備。6時半出発。上
空は雲が覆っているが、雨の気配は未だ無い。温身(ぬくみ)平まで整備された林道を歩く。
新緑が芳しく静かな散歩道。飯豊山本峰へ向かうダイクラ尾根ルートと別れ、梅花皮沢に
沿って細くしっかりした踏み跡を辿って登る。1時間ほど登ると梅花皮岳から流れる滝沢
の雪渓が見える。滝の大半は雪で覆われている。標高900mでこの時期のこの雪の量！

冬の間の豊かな降積雪が想像される。本流の雪渓を左下に見ながらしばらく登ると谷が開
け、石転び沢末端が見え始めた。入り門内沢との合流点にて雨具を着け、上部がガス覆わ
れた石転び沢雪渓に足を踏み入れる。畔に千島桜を見付け、写真を撮りに雪渓を横断した
り、雪面にある直径2mの大岩を観察したり、右に左にウロウロしながらゆっくりと登っ
てゆく。雪面は硬くフラットでデブリの荒れもなく歩きやすい。

雪渓の半ばまでは緩い上り、中ごろで幅が狭くなり、傾斜が強くなる。このあたりから雲
が下りてきて視界がいっそう悪くなる。石転び沢の由来と謂われる大小の石が雪の上に転
がっており、ガスの中から突然石が転げ出てくるのではと緊張し、足が早くなる。傾斜の
緩くなったところで小休止。ガスに隠れた稜線を目指し、傾斜の強くなってゆく雪面にア
イゼンを効かし、ピッケルや傘杖を使って、約1時間。稜線に出ると小屋はすぐそこだ！
人の声も聞こえる。梅花皮小屋は2階建ての立派な小屋で、シーズン中は地元山岳会が管
理し、利用料1000円。早速2階の一角に場所を確保し、夕食前の一杯で疲れを癒す。水場
は小屋から3分のところに水源からの引水が豊富に流れている。ガスは晴れないが夕食ま
でに梅花皮岳を往復することとした。這い松、笹、低灌木の間を縫うような小道をたどり、
雪解けを迎えて咲き誇る花に迎えられ、豊富な残雪で埋められた深い谷を眺めながら30分
ほどで山頂。一分咲きの千島桜に囲まれた山頂でガスの切れるのを待つ。ガス切れず下山
開始、途端にガスが薄れ始め、山腹の斜面の模様を楽しみながら小屋へ。

小屋で夕食、寝酒、明日の天気を期待しつつ就寝。

6月7日（日）夜半からの雨音が朝も続く。ガスと西風、冷たい雨の中、まずは門内小屋目指して出発。北股岳はガスの中、展望きかず通過する。道は笹、低灌木、千島桜、這い松の中を緩やかなアップダウンが繰り返し続く。眺望がきけば素敵な山道だろうナと想像をめぐらせながら、横殴りの冷たい雨にひたすら歩く。門内小屋は稜線に建つ1階建ての立派な小屋。昨日ここまで足を延ばしていればコストがかからず、静かな夜を過ごせたのに、とチョッピリ悔やんでみた。

ゆったりした稜線を眺望が効かないため少し早足で進む。胎内山を過ぎ、梶川尾根ルートに分岐もはっきり確認できず地神山へ。山頂は雪に覆われ、ガス未だ晴れず、道がはっきりしないが丸森尾根への道は北の方向と定め、谷に下りないよう稜線の背を辿る。地神北峰からは所々残雪で道が消えているが、花が咲き、日も射しはじめ、気分よくどんどん下ってゆく。丸森尾根下部は急で、登りには使いたくないルートではあるが、下りもストックもつきにくく、膝への負担が大きいシンдой道だった。駐車場に着く頃は雲の切れ間から青空がのぞき始め、すがすがしい緑と雪解けの瀬音を後に帰京の途へ。

国民宿舎梅花皮荘奥の温泉で汗を流し、国道沿いの蕎麦屋で遅い昼食を食べ、北陸・長野・中央道を1000円で駆け抜け、私の初めての東北の山旅は完結した。

次回は錦秋の飯豊山、山小屋利用で3泊4日で稜線散歩を楽しみたい。



梅花皮岳山頂と千島桜

と き : 平成 21 年 9 月 12 日～15 日

メンバー : 福山昇二、他 3 名

まえがき

3, 4 年前に日本 1 0 0 名山のガイドブックを購入した。購入時にチェックを入れると主に日本アルプスを中心に 5 0 数座登っていた。最近の 1 0 0 名山ブームにちょっと抵抗はあったが、先輩の澤井さんが 1 0 0 名山を登っていると聞いて刺激になった。登りだすと^は嵌まってしまった。九州の山は夜行フェリー、北海道の山は夏休暇、東北は連休、関東の山は土・日を利用し、主に登山口近くのキャンプ場又は車で仮眠する日帰り登山である。

今回、光岳を登り、後 6 座となった。同行者は役所のジョギング仲間を誘っている。

せっかく、南アルプスまで出かけるのに 1 0 0 名山として残った光岳だけ登って帰るというのももったいないなと思い、南アルプス南部の名山・聖岳も加えた。

9 月 1 2 日 (金) 曇りのち雨

7:00 畑薙ダム・沼平ゲート駐車場 7:25～大つり橋 8:05～8:35 ヤレヤレ峠 8:45～9:35 ウソッコ沢小屋 9:45～11:05 横窪沢小屋 11:15～13:55 茶臼小屋 (T. S)。

前夜、高速を降りて途中、仮眠し沼平ゲート駐車場に到着。しばらく林道を歩き、畑薙湖にかかる大つり橋を渡って、ウソッコ沢ルートに取り付く。この 181m の大つり橋を一度、渡ってみたいと思っていた。高度感満点で途中、下をのぞくと激流に飲み込まれそうである。久しぶりにテントを担いでの急な登りで疲れる。茶臼小屋のテント場に到着すると雨が降り出した。

9 月 1 3 日 (土) 曇りのち晴れ、風強し

T. S (テントサイト) 5:50～茶臼岳～11:00 光岳 11:05～16:05 T. S

昨夜は雨、風が強くテントが飛ぶのではと心配になって時々、眼がさめる。雨は止んだが風が強い。稜線に出ると風で飛ばされそうになり、歩行に時間がかかる。このままだとピストンは無理かなと思いつつも歩き続けるが、樹林帯の中では風は弱まる。3 時間ほどで風は収まったが、風の中の歩行で疲れ、光岳までは長かった。

9 月 1 4 日 (月) 晴れ。

T. S 5:30～7:05 上河内岳 7:15～8:35 聖平 8:50～11:00 聖岳 11:20～11:55 小聖岳 12:00～12:45 聖平 13:00～14:45 上河内岳の肩 14:55～16:00 T. S

昨日の疲れもあり、脚が重い今日は 3, 0 0 0 m 峰・聖岳 (1 0 0 名山) である。途中、上河内岳を登り、2, 3 0 0 m の聖平までどんどん下る。聖平はのんびりした

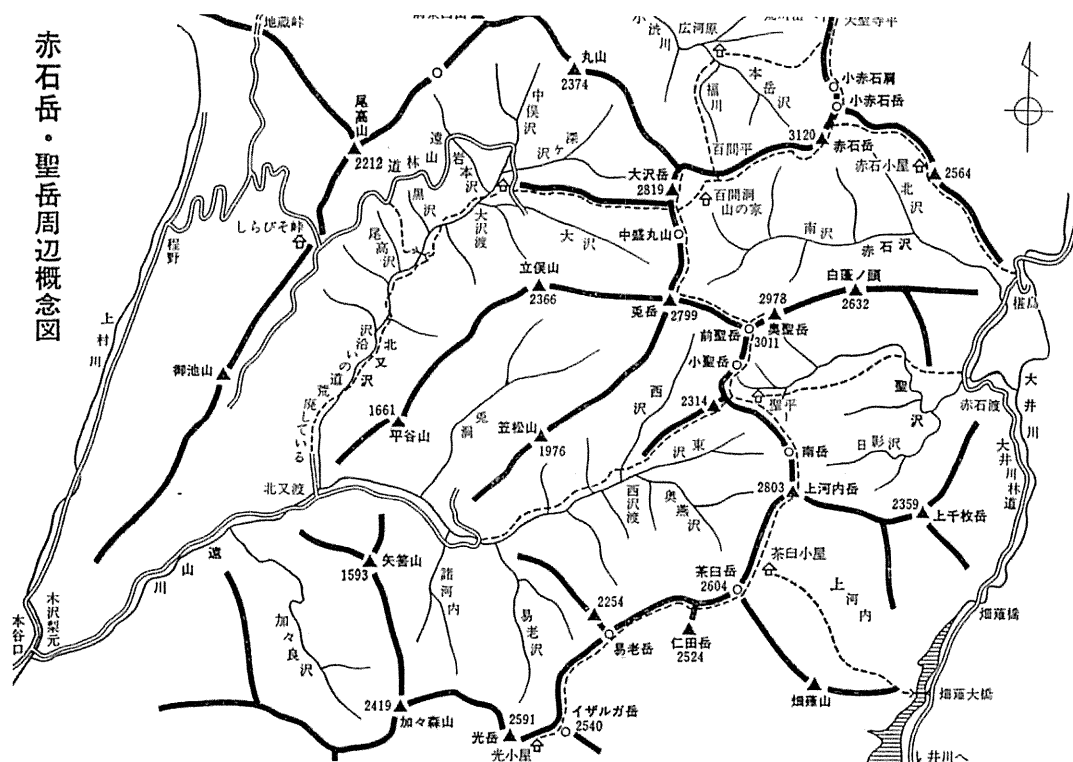
良い所で昼寝でもしたいところだが、そんな時間はない。ここから頂まではほとんど登りで、小聖岳を越えたところから、ひたすらジグザグの急登となる。頂上は快晴で360度の展望であった。

9月15日(火) 曇り

T. S 5:50~7:20 横窪沢小屋 7:30~10:40 沼平ゲート

今日は下山日。4日間の連続行動はさすが疲れる。急な下りでは脚が笑う。初日はこんなにキツかったかなあーと思いながら、ヤレヤレ峠まで来るとホットする。大つり橋を渡り駐車場に到着。

(記 福山)



概念図：「日本登山大系9 南アルプス」(234頁)

僕は4回生の時にAAVKの委員長をしていましたので、その延長線にあったAAVK・OB会の人たちを良く知っていました。その頃は山登りが生活の中に鎮座しており、就職しても山登りを続けているOB会の人達を羨望の気持で見っていました。山行から戻り、出発する時と同じ空気の下宿に戻り、止まったままのカレンダーをよく見つめていました。山に行った日に赤丸をつけており、赤丸が付かない日が続くと寂しく思っていました。ヒマラヤに行くチャンスがあればと思っていた頃でしたので、身近な会で遠征隊が出ると聞き、悩むことなく申し込んだ事は言うまでもありません。その時OB会長であった小林さんは、いつも大学におられました。雲の上の人という訳でもなく、酒が入ると気さくに「山」を語ってくれました。また、登り方に拘りをもっておられ、学術や山と社会人の両立の話をよく聞きましたが、血気はやるその頃の僕はあまり理解できませんでした。гент峰に参加するまで、岩場のトレーニングや合宿で一緒にした事はありませんので、「何故日頃から登らないのですか？」と酔っ払いの時間帯モードになると質問し、いつも叱られていたような気がします。

гент峰登山隊の準備場所が必要になった時に、工学部の部屋を梱包場所に使う事も苦勞して交渉されたようでした。準備期間が大切でチームワークもその間に作らなければと言われて、綺麗な梅田のミーティングルームを見つけられ、渉外や事務的な処理を一手に引き受けておられました。良い意味でいつも議論の絶えない隊で、小林さんはイライラとされる事が時々ありました。僕は与えられた、食料係を淡々と進めていました。食料は寄付で集めるものとの命題を受け、資金力がなく母体のない隊では、足で寄贈先をこまめに回るほかありません。次第に食料の山に囲まれていく事を、あたかも自分の食材が確保されたようなリッチな気分になり嬉しく思いました。また隊の食料は、下宿の身には嬉しいものでしたが、最初は美味しかった缶詰でも食べ続けるとあまり美味しいものではなくなりました。

「гентの嵐」という英文の原書を訳せと言われ、辞書を引ながら翻訳した記憶があります。下手な訳文でしたが、小林さんが見て笑っていました。どちらかといえば現場は、先鋭・困難・アルピニズム的な登山を求める雰囲気がありました。

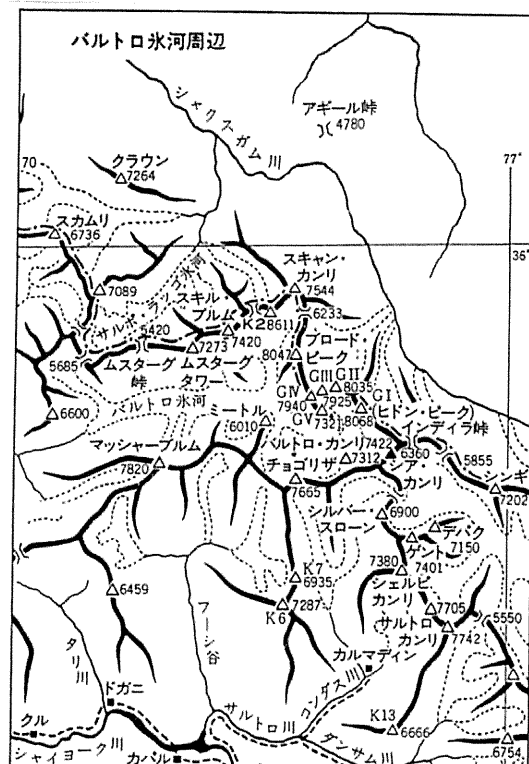
僕は、キャラバン途中の発熱がそのまま尾を引いてしまい、体調不良のまま登山活動に突入してしまいました。前衛峰で7000m程のデバックピークまで登りましたが、その山を越えてгентⅡ峰までは辿り着くことが出来ませんでした。色白な肌の小林さんが、派手に日焼けした顔で、頂上の石をニッコリ笑って、差し出してくれたことを覚えています。

僕は毎年開かれる「гент会」には時々の参加しかできませんでしたが、小林さんは

いつも話題の中心となり、会の常連メンバーとして泊まり組の酒宴を楽しんでおられました。30年が経ち、「гент会」も解散することになりましたが、時空を越える小林さんの話を聞く事が出来なくなって、残念です。小林さんの拘った山登りが理解できないままに、月日だけが経過してしまい、新しい登り方を模索する年代も過ぎてしまいました。自分なりの「心の山」を登るような活動をするに留まり、体力も落ちつつあります。準備段階ではこれをステップとして継続的に登るプランも出ていましたが、予想に反して一度で終わった AAVK・OB 会の遠征隊となりました。小林隊長の隊に参加し、貴重な経験が出来たことは、以降の活動の中で色々役に立ちました。

「高所に於ける山岳道路の研究」という学術的なテーマを隊長稼業と併せて行う、と聞いた事がありますが、あれは酒を飲んだときの話であったのか定かではありません。カラコルムの田舎は道路なんてものは無く、細い石ころのキャラバン道があるだけでした。

遠征が終わって、暫くは報告書を出さなあかんと言っておられましたが、結局出すことも無くまたこれからも無いでしょう。小林さんの、拘りとカッコ良さの追求の最終章を聞けずに、残念に思いますが、山の環境も登るスタイルもドンドン変わってしまい、今はインド領になっているかもしれません。



ゲントⅡへ行ったのは31年前であり、当年62歳の私にとっては丁度半分という事になる。それ以前と以後が同じ年数とはとても思えないのは、若い頃と時の速さが違うという事か。

ゲントⅡは私にとって最初の、そして最後のヒマラヤである。また、関西学生山岳連盟OBの会としても最初で最後の山行になってしまった。

入道雲

私はヒマラヤはおろか、海外旅行さえ行った事がなかったから、先にヒマラヤトレッキングを経験している後輩にヒマラヤの山々の高さを聞いた事がある。

彼の返事は、入道雲を見上げるようだと言った。入道雲の高さは八千メートルから一万メートルぐらいと言われているので、なるほどなあと思って見上げたもので有る。あんな高いところへ。

OB会の始まり

当時、私の所属する大阪工大山岳部ではかつて程の部員数はなく、各学年に1、2名を数えるのみであった。このような部員数の減少は他の大学山岳部でも同様であり、その運営と山行レベルの維持に苦勞していたようだった。

もともと関西の大学山岳部の横のつながりとして有った関西学生山岳連盟の会合、あるいは山行を通して知り合った同年代の者達が苦勞を共有するのは自然の流れで有った。

現役の山岳部では無理でも、社会人になれば大学の枠を越して山行が出来るのではないか、このような思いの元「関西学生山岳連盟OBの会」(AAVK・OBの会)を結成し行動を始めた。

当然の事ながら、大学山岳部で十分な山行を行って来た者同士である。何処へ行っても何の問題もなく快適な山行を堪能出来たのは言うまでもない。夏も冬も、各々が持つ技量で各々が勝手に行動しているようで、チームワークは取れていた。

私の主な山行はほとんどこのころに行ったものである。

このような山行を続ける内にヒマラヤを目指そうとの思いは当然のごとく沸いてきた。

遭難

数々の山行をへてヒマラヤへの機運が高まりつつあったその時に、あろう事か私の後輩が遭難死した。予想通りと言うべきか、他の大学OBと行動する余力が有れば、自分の後輩・現役山岳部の為に力を割くべきではないか、との非難を受け続ける事になった。

OBの会としても、ヒマラヤへの意欲が減退したのは仕方がなかった。再起を期して地道に山行を続けるしかなかったのだが、少しずつ体力の低下するのを意識せざるを得なくなってきた。更にその後、自己都合ではあるが勤めを辞めどう生きるべきか迷っている時期でもあった。

計画

事故は有ったが、ようやくOB会としてもヒマラヤの気運が高まってきた。問題はどの山を目的とするかである。当時の会員の技術レベルは高く、これらのメンバーをしてどん

な山も不可能ではないと思えた。

何度かの会合の後、会員の意識はカラコルムのかかなり上級な山を目的とするようになった。私としては仕事を辞めてフリーター状態であり、これを逃すと二度とヒマラヤなどいけないとの思いであった。もはや人生の先行きを決めねばならない歳であった。

このころ、ヒマラヤ行きを決めた小林先生が参加してきて年齢・経験・職業等から隊長に決まった。ここで、隊長と他の隊員とで目的の山を何処にするかでかなり議論があったが、結局小林隊長の意見が通り、гент II と決まった。

当時のメンバーの技量は高く、これらが集まっの OB 会で有る故、ヒマラヤのバリエーションでも、8000m 峰でも何でも行けたかもしれない。一方、母体を持たない私たちには遠征費用を自腹で工面し参加しなければならず、当然のごとく全員登頂が最大の目標になった。

これらを考えれば、гент II という地味な山に決まったのも致し方ないとも思える。

私と言えば、メンバーの中で最も非力な方であり、難しい山で登頂から外れるのか、比較的易い頂上を得るのかの選択であった。当時も今もどっちが良かったか解らない。

キャラバン

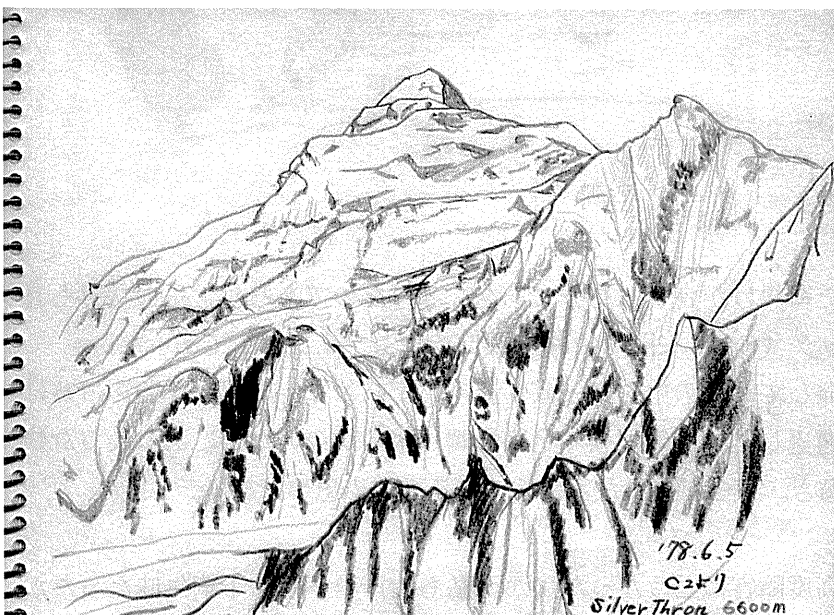
初めての海外はカラコルムとなった。何もかもが初めての経験であった。そしてポーター達とのキャラバンは苦しいものとなった。

実は山岳部に入った頃より足の痛みに悩まされていたのが更に痛み出した。元はと言えば靴に合わない足が原因なのだが、最初にキャンプ地を出発して、到着は最後尾の有様だった。

ようやく氷河上に C2 を実質のベースとして設営し、上部への荷揚げが始まった。

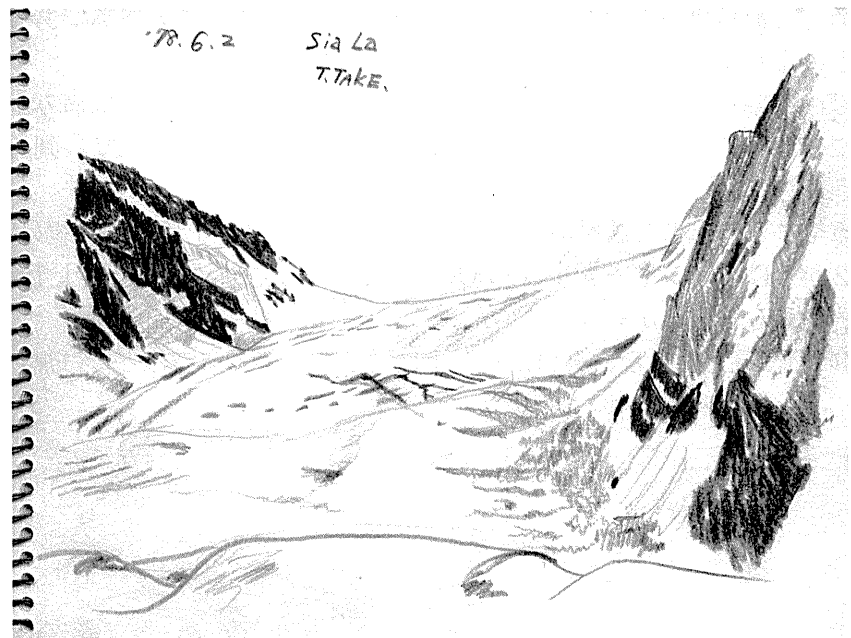
C2 からはガッシャブルム・バルトロカンリ等が望め、氷河の土手のようにシルバー・スローン 6600m がそびえていた。

目的の山は見えないが、あれよりも上に有るのだ、入道雲ほどでは無いだろうけど。



ばならない。гентⅡという氷河最奥の山が目的である故、荷揚げが主体の山行になり、ドラマチックな事はなくただ毎日が労働と言うような山行になったが、結果として私に幸いした事になる。

足も弱点だが、この山行でもう一つの弱みにつきあう事になった。紫外線である。空気が澄んでいるのか高度のせいかわからない、国内の山行では経験しないほどだ。顔は焼けて炎症を起こしているが、唇までただれてきた。ただれた唇がシュラフの中で寝ている間にくっついてしまい、朝起きてても口が開けられなくなった。口の内側から徐々に張り付いた唇を溶かし、やっとの事で口を開ける始末だ。これでは朝食に遅れを取ってしまう。どうすべきか考えた上、ガーゼで目の部分だけを開けた頭巾を作った。目出帽は有るのだが、これだと息が苦しいし、重い。その点このマスクは軽くて使い勝手が良かった。以後ずっとこれで通した。当時の写真を見ると何とか天狗の白頭巾版である。



登頂・高度障害

私にとっては長く続いた荷揚げが良いトレーニングになったのであろう。足の状態も良くなり、登頂前日にデバック（C6）に達した頃は最高のコンディションであった。

当日はAM3時前に出発して暗闇の中を真っ直ぐ進み、デバック・гентⅡ間のコルにある小さなコブも一気に通過した。寒気は強く足は快調、全てが今のためにあるような快適さだった。登頂は6時過ぎ。やっと来れたと言うのがその時の思いである。

ヒマラヤに付きものの高度障害はどうだったのか。私も山行中不眠と下痢気味だったがこれは誰しものようで、他に頭痛も無くこれと言うほどの高度障害にはならなかった。

かかった事のない病状は理解できないもので、このため高度障害で苦しんでいるのが不

思議に思えたりもした。ついでながら、私は乗り物酔いも経験がないため、これで苦しんで人から配慮のなさを非難された事が有る。

ラワルピンディで隊は解散し、各々別の方向へ散らばった。私は陸路イスタンブールに向かう事にし、隊員の2人と共にバスでアフガニスタンに入った。そのアフガンの首都カブールで今まで全く縁の無かった病に罹ってしまった。ドクターから貰っていたビタミン剤・胃薬・下剤その他諸々の薬剤をまとめて飲んで2日ほど寝込んだら、何とか快復した。多分水のせいだと思うが、高度では苦しまなかったのに。

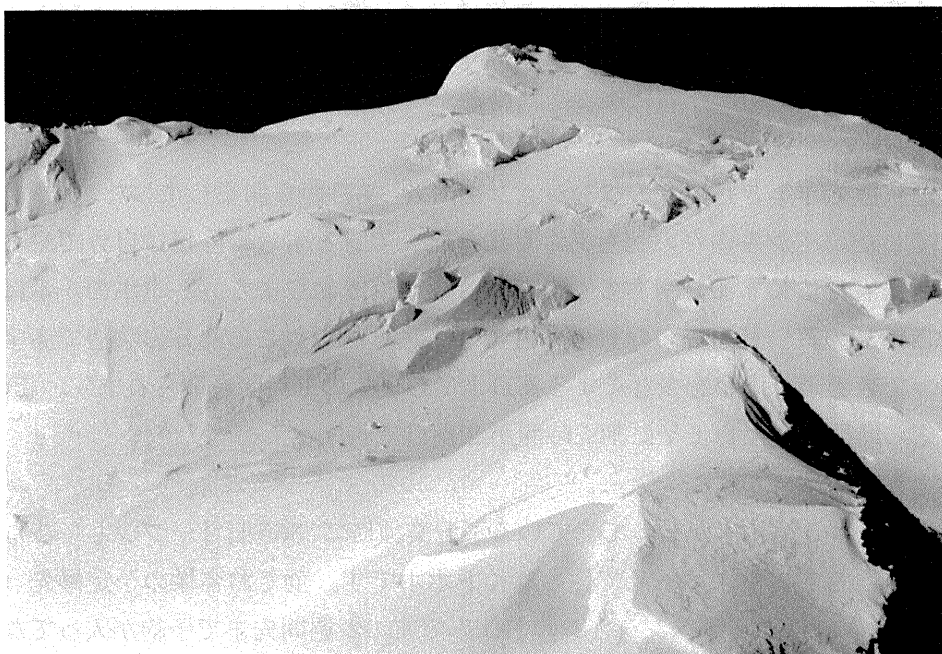
山行後

この山行に参加した者の何人かは、職場から休暇を得て参加したようだが、私は帰国後すぐに職探しが始まった。何不況だったかは忘れたが、景気は良くなかった。そんななか、元の技術屋で生きるのかはたまた別の道を模索すべきか、さらに借金の返済も迫ってくる。私にとってこの時分が最も苦しいときだった。さらなる山行など考えも出来なかった。

ようやくにして成った AAVK・OB 会のヒマラヤであったが、私にとってすでに過去になりつつあった。

思えば私のヒマラヤは、力有るメンバーに助けられて登らせて貰ったように思える。そして、それらの人たちと山行を共に出来た事を幸運だと思う。私にとってのあの高みへの到達は、一瞬の好事のようなものかもしれない。

今、雲を見上げたとしても、かつての想いはない。



此処白馬みそら野別荘地のペンションに越してきて早1年半が過ぎようとしています。海外でのロングステイでなく、国内田舎暮らしロングステイのつもりでおります。ペンション経営をしながら田舎暮らしを楽しもうとの魂胆でしたが、なかなか思うようにはいきません。トホホこんなはずではなかったのに、と思う1年でした。普通の百姓の真似事ではなくペンションをやろうとした動機は、ある田舎暮らしの情報誌の「年金プラスアルファの収入で悠々田舎暮らし」と記したペンションオーナーの連載を読んでからです（後で分ったのですが、彼は彼の妻と出戻り娘と孫と4人でやっていますので、悠々出来る訳です）。

小生の妻はスーパーまで買い物に20分以上もかかるような山奥に住むのなら離婚だと言いますし、料理とおしゃべりが大好きなので沢山の人が来るペンションならついていってあげても良いとの事にて、2年ほどかけて探し回り此処白馬にてボロボロの古いペンションを購入しました。普通の快適な田舎暮らしを始める費用よりはかなり安く購入できる中古ペンションが沢山ありますので貧乏人の私でも何とか買えたのですが、これが大きな間違いでした。

更に、2年程前から、私は「定年うつ病」（意欲障害）に掛かり、心療内科に通い治療してもらってるのですが直りません。とにかく全てのことにやる気意欲がでてきません。山登り、スキー、魚釣り、鉄道模型等定年後タツプリ楽しもうと思っていたのですが全く意欲がわきません。あれほどやりたかった事に意欲が湧かず、今は義務でやらねばならぬ最低のことをやるのが精一杯の状態です。ひどくなると生存意欲が無くなるそうです。

こんな状態で昨年5月に今のペンションを購入、7月から開業しました。2ヶ月間DIYの毎日でした。ペンキ塗りの腕もあがりました。できる限りの修繕は自分でやらねばなりません。業者に依頼する修繕も多々あり、今も続いております。トホホの一番は予想以上の修繕と備品の買い替え等の経費の多さです。決算にてもこの部分の数値で赤字となりますし、できる限り出金を少なくする為DIYします所以時間を取られます。この1年お客様対応の時間の次にDIYに割く時間が2番目です。

年々ペンション宿泊者が減ってきている不況業種にて、365日オープンして少ないお客に対応せねばならず、マイペースで休めなくトホホです。全てお客様の予定優先（当たり前ですが）、お客の無い時がペンションのお休みです。2週間先まで予約が入ってないので大阪に帰省したら数日後予約が入り、慌てて白馬に戻った事が2度ほどありました。お客様を断る余裕を持ちたいのですが…トホホ。

集客の為にはホームページ作成、広告の検討、集客業者（楽天、ベ初ットワン等）の事務処理等やらねばならぬのですが、全くやる気がせず逃げ回っており、妻から何時も叱られております。・・・トホホ

1年を通じ、大体の来客傾向が分りました。宿泊人数の多い順に、8月、1月、5月、7月、12月となり、2月3月のスキー客は案外少ないです。4月、6月、11月は殆ど無です。9月10月は昨年少なかったのですが、今年は多かったです（原因は連休？）。来年の4月6月には宿を閉め長期の旅行に行けそうです。11月は凍結の心配もあり此処を離れられません。山登りは出来ませんでしたが、スキーは2～3時間の暇があれば行けますので何回か行きました。（八方尾根のゲレンデまで滑って5分）。梅池の小笹スキースクールにも日帰りですが参加できました（妻の許しを得て）。

5月に休耕田を借り、200坪程耕しています。（やっと田舎暮らしらしくなってきました）中古の耕運機を買い、D I Yの師匠の手を借り農小屋も作りました。7・8月は農作業と小屋作りが来客と重なり忙しい日々でした。先週もそうでした。（玉葱の植え付けと客が重なっています）・・・トホホ。妻は畑の雑草抜きをするくらいならペンションの庭の草抜きをしろうるさくいいです・・・トホホ。白馬三山を眺めながらの農作業は最高です。昨日は畑の虫を雉が歩いておりました。今日からD I Yの師匠の手を借りて薪小屋作りを始めました。

ペンションの仕事の内、小生が担当しているのは、午前中チェックアウト後の部屋の掃除・ベッドメイキング、午後から食材の買い物、朝夕客への給仕で、妻は午前はタオル等の洗濯、午後は料理の仕込みと調理、集客の為の営業活動一切で、負担は妻の方が大きいです。いずれにしても来客日の午後と次の日の午前は潰れます。お盆の頃はこれが毎日続きヘトヘトになります。お客の無い日はD I Yか長野市か大町へ出て気晴らしと安い食材の大量購入とガソリン（白馬は高い）入れです。サラリーマン時代と比し余裕時間と余裕気分がありません。

この数ヶ月の小生の平均的な1日は、来客有りの時、朝食のサービス・皿洗い、精算集金見送り、部屋掃除ベッドメイク（14時までかかるときもあり）、昼から整形外科で首の牽引（頸椎神経狭窄）、食材の買い物、夕食の給仕・皿洗い。来客無しの時、首の牽引・畑又は薪割り（雨天時休み）。畑仕事と薪作りの時間捻出に苦労した感が強いです。薪は4月に森林組合から7トン8万円で購入した2mカットの檜の原木をチェーンソーで玉切り、斧で割り終えるのに10月中旬まで掛かりました。畑仕事の最適期に来客が重なることが多く、忙

に住んで満足はしております。山は登るものでなく眺めるものになりました。チロルかスイスの村を思わせる景観にひかれ定年後移住してきた方も多く、外人もかなり移住してきております。

ペンションの仕事を甘く見すぎていたことと（部屋の掃除と買い物がこんなに大変と思わなかった）、これ程自分の時間を取られるとは思っていませんでした。黒字の月はしんどいです。悠々の月は赤字です。遊び最適期には客が来て自分の遊びが出来ない、この仕事に注力しないと黒字にならない等々誤算だらけです。

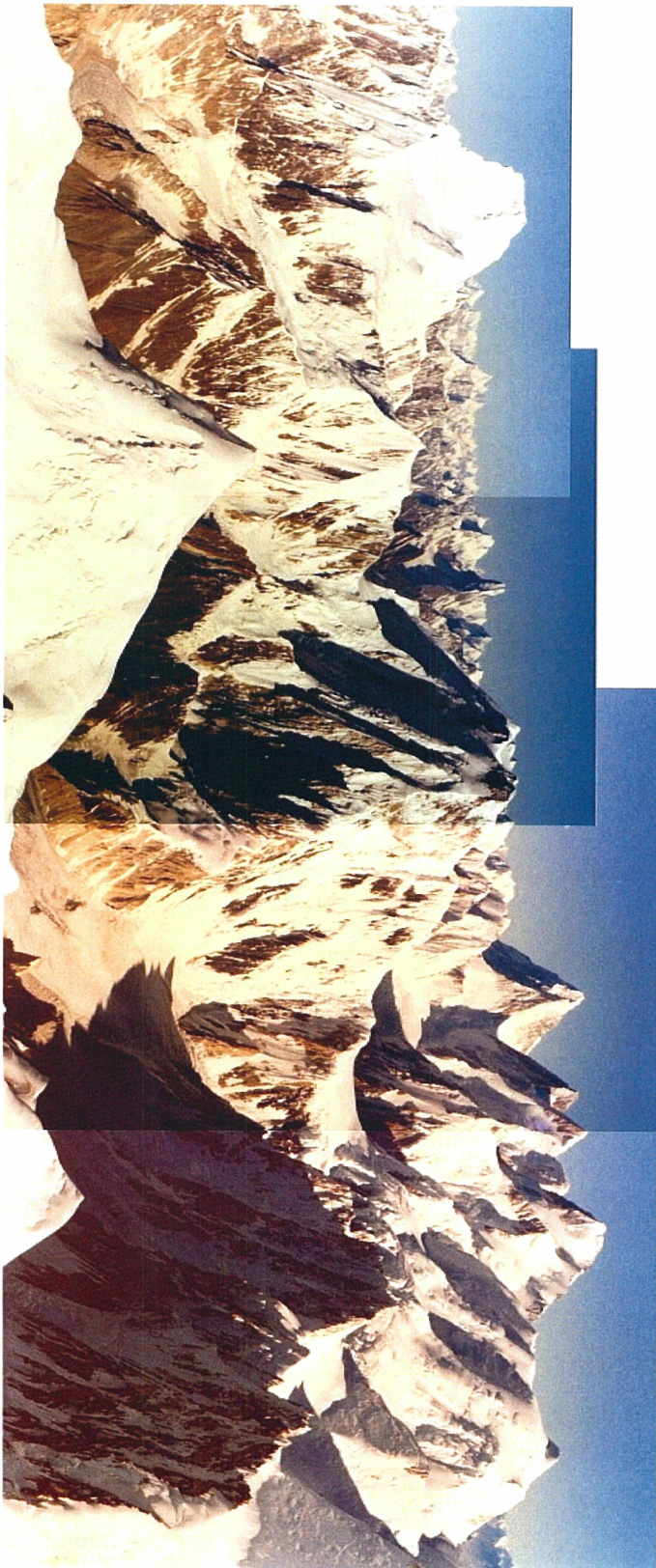
旅館業を真面目に努力する人なら良いでしょうが、片手間に悠々田舎暮らしにはとてもなりません。仕事に慣れて上手く手抜きが出来るようになれば良いのでしょうか、難しいようです。この別荘地に定住し白馬の生活を満喫されておられる方が沢山居られます。羨ましい限りです。単純な田舎暮らしに留めておけば良かったと思う今日この頃です。

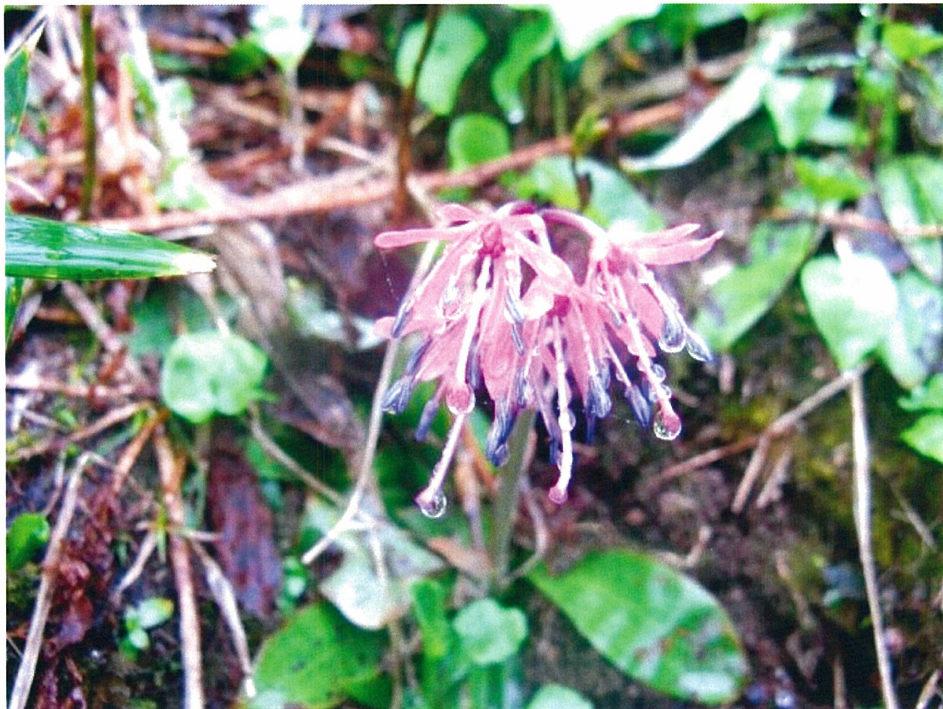
（後２年程我慢すれば年金プラスアルファになると思いますがそれまで持つかどうか）

<編注>

大島夫妻のペンション「白馬 るんぴに一」の外観は以下の通りです（HP よりの転載）。







<編集後記>

- ・ 今年の5月、岡本さんから大阪商大および大阪市大山岳部の歴史に関する座談会を収録したカセットテープを預かりました（全部で5ケース）。
ゲントⅡ峰登山は31年前とのことですが、こちらは29年前のものです。
テープを始動させますと、すでに鬼籍に入られた方々の懐かしい発言に交じって、思いがけず30代の私の声に出会い、聞き入ってしまいました。
- ・ この座談会内容を踏まえて、大橋会長（当時）は「有恒会百年史」のクラブ紹介欄に寄稿された訳ですが、それが大市大山岳会 HP の「山岳会の歴史」へ転載されることにもなったことを確認できました。
- ・ 本テープは来春、「ヒュッテ雪線」に移管予定です。（奥田 記）